

米国の競争性の高い大学における入学選抜

山形伸二（九州大学）， 繁榊算男（帝京大学）

本研究では、アメリカにおいて比較的競争性の高い4つの大学(ペンシルバニア州立大学，ブラウン大学，ボストン大学，ハーバード大学)のアドミッションズ・オフィスを対象とした訪問調査の結果を報告する。具体的には，1) アドミッション・ポリシー，2) アドミッションズ・オフィスの組織，3) 入学選抜プロセス，について結果を要約し，各大学に共通する入学選抜の特徴について，公平性，信頼性，妥当性の観点から考察する。

1 問題

日本で最初のアドミッションズ・オフィス(AO)入試が1990年度に慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)で行われてから20年以上が経った。この間，AO入試の規模は飛躍的に拡大し，2000年度からは国公立大学にもAO入試が導入された。文部科学省(2012)によれば，平成24年度入試において，70国公立大学137学部(それぞれ国公立大学全体の43.2%，31.4%)，460私立大学1,112学部(それぞれ私立大学全体の79.4%，68.1%)がAO入試を実施した。入学人数は，国公立大学において3,416名(全体の3.2%)，私立大学においては47,210名(全体の20.7%)であった。

ただし，一口にAO入試といってもその内実は様々である。SFCにおけるAO入試は，学力試験の成績を求めず面接を重視しており，導入当初からアメリカにおけるcollege admissionsとは異なっていた(中井，2007)。また，競争性の高くない私立大学においては，少子化が進む中で入学数を確保するための方法として，AO入試は推薦入試と共に学力試験を課さない「非学力型」選抜のひとつとして拡大してきた(小谷野・繁榊，2011)。一方で，有力な国立大学におけ

るAO入試は学力を重視した選抜を行っているものの(e.g. 倉元，2011)，定員数は少ない。日本において最も競争性の高い東京大学と京都大学においてもAO入試は導入されていない。

しかし，昨今，東京大学が後期日程の廃止と推薦入試の導入を発表し，京都大学も独自の入学選抜方式の検討を開始するなど，日本における競争性の高い大学も入学選抜方法の転換期を迎えている。このような時期に，AO入試の発生の地であるアメリカの，とりわけ競争性の高い大学におけるアドミッションズ・オフィスのあり方を確認することは，今後の入学選抜のあり方を考えるうえでひとつの参考となるであろう。アメリカの大学のアドミッションズ・オフィスの実態を報告したものには既に東京工業大学(1988)，細川・小川(1999)，倉元(2005)などがあるが，本報告では，特にアメリカにおいて競争性の高い4つの大学に焦点を当て，そのアドミッションズ・オフィスの実態について報告する。

2 各大学の概要 (事前調査)

2.1 ペンシルバニア州立大学

(Pennsylvania State University)

オンライン・キャンパスと州内各地に計21のキャンパスを持ち、160以上の専攻があり、約90,000人の学部生・大学院生が在籍している。メイン・キャンパスであるユニバーシティパーク校には44,000人の学部生、大学院生が在籍し、2,500人の教員が所属している。通常、学生は2年生の後半(春学期)まで自らの専攻を変更することができ、特定の専攻を決めずに入学することもできる。前半の2年間と後半の2年間で別のキャンパス・専攻を選ぶことは2+2プランと呼ばれ、広く用いられている。

出願者には、高校において14単位を習得することが要件とされている。14単位には、英語(4)、数学(3)、社会科学(3)、科学(3)、外国語(2)が含まれる。Advanced Placement (AP)、国際バカロレア (IB) 等を含む大学進学予備プログラムを習得することが推奨されている。標準学力試験としては、SAT I または ACT の成績の提出が求められる。出願は、高校の正式な成績証明書を郵送する他は、原則大学のウェブページを通じ、オンラインでペンシルバニア州立大学用願書(500語のエッセイを含む)を提出することでなされる。2012年は、ユニバーシティパーク校において、44,502名の入学志願者中、23,855名が入学を許可され、7,306名が実際に入学している。入学者の中位50%は、SAT 読解で530-630点、数学で560-670点、作文で540-640点である。

2.2 ブラウン大学 (Brown University)

学部学生数は約6,000名、大学院生数は2,000名、医学部生400名、教員数は700名である。44の研究科に約80の専攻がある。通常、学生は2年生の後半(春学期)までに自らの専攻を選択する。全ての学生は、少なくとも最初の3年間、キャンパス内の寮で生活

する。

出願者には、高校において19単位を習得することが勧められている。19単位には、英語(4)、数学(4)、科学(3)、歴史(2)、外国語(4)、音楽・美術(1)、その他選択科目(1)が含まれる。カリキュラムの強さ(APまたはIB等、大学進学予備プログラムや高度な科目をどの程度履修しているか)とその学業成績が最も重要とされている。標準学力試験としては、SAT I または ACT と、SAT II のうち2科目の提出が求められる。出願は、原則 Common Application を通じオンラインで行われる。各大学共通願書の他、ブラウン大学用願書 (Brown supplement)、高校内申書 (Secondary School Report)、高校3年生前期の成績 (Mid-Year School Report)、教員2名からの評価書 (Teacher Evaluation) を提出する。ほとんどの出願者が卒業生との面接を受ける。家庭の学費負担力は選考にあたっては考慮されない(ニード・ブラインド・ポリシー)。2012年は、30,944名の入学志願者中、2,757名が入学を許可され、1,507名が実際に入学している。SAT 読解の中位50%は660-750点、数学は680-770点、作文は670-770点である。

2.3 ボストン大学 (Boston University)

16のカレッジ、250の専攻に16,000名の学部学生、14,000名の大学院生が在籍している。外国人留学生の受け入れに積極的であり、2012年の新入生の17%が外国人留学生である。教員数は2,600名。出願の段階で志望するカレッジと専攻を決める必要があるが、教養学科を志望すれば入学後2年間かけて自由に専攻を選ぶことができる。

出願者には、高校において15単位を習得することが要件とされ、20単位の修得が推奨されている。20単位には、英語(4)、数学(3~4)、社会科学(3~4)、科学(3~4)、外国語(2~4)が含まれる。AP や IB を含む大学進学予備プログラムの習得も要件とされている。標

進学力試験としては、SAT I または ACT の提出が求められ、学科によっては SAT II のうち 2 科目も必要となる。出願は、原則

Common Application を通じオンラインで行われる。各大学共通願書の他、ボストン大学用願書 (Boston supplement)、高校内申書、高校 3 年生前期の成績、教員 1 名からの評価書、正式な高校の成績証明書を提出する。カウンセラーからの推薦状も評価される。

2012 年は、41,802 名の入学志願者中、20,662 名が入学を許可され、4,023 名が実際に入学している。SAT 読解の中位 50% は 570-670 点、数学は 610-700 点、作文は 600-680 点である。

2.4 ハーバード大学 (Harvard University)

学部学生数は約 6,700 名、大学院生数は 4,000 名、教員数は 2,100 名である。11 の研究科に、44 の専攻がある。通常、学生は 2 年生の春学期までに自らの専攻を選択する。全学生はキャンパス内の寮で生活する。

入学志願者には、高校において 21 単位を習得することが勧められている。21 単位には、英語 (4)、数学 (4)、社会科学 (3)、歴史 (2)、科学 (4)、外国語 (4) が含まれる。

AP や IB を含む大学進学予備プログラムの習得も推奨されている。標準学力試験としては、SAT I または ACT と、SAT II のうち 2 科目の提出が求められる。出願は、原則

Common Application または Universal College Application を通じオンラインで行われる。各大学共通願書の他、ハーバード大学用願書 (Harvard supplement)、高校内申書、高校 3 年生前期の成績、教員 2 名からの評価書、正式な高校成績証明書を提出する。ほとんどの出願者が卒業生との面接を受ける。家庭の学費負担力は選考にあたっては考慮されない。

2012 年は、34,950 名の入学志願者中、2,188 名が入学を許可され、1,661 名が実際に入学している。SAT 読解の中位 50% は 690-790 点、数学は 700-800 点、作文は

690-790 点である。

3 訪問調査の方法

訪問調査は、著者 2 名により、2012 年 11 月 5 日～9 日の 4 日間にわたって実施された。

3.1 調査対象者

ペンシルバニア州立大学については、ランチョン・ミーティングの形式で、C. Schwab (Director of Admissions Services and Evaluation) を含む計 4 名を相手に約 2 時間行われた。ブラウン大学については、J. Miller (Dean of Admissions) を相手に 1 時間ほど行われた。ボストン大学については、K. Walter (Associate Vice President & Executive Director) 他 1 名を相手に 1 時間ほど行われた。ハーバード大学については、T. Dingman (Dean of Freshman), R. M. Worth (Director of International Admissions) を相手に、それぞれ 1 時間ほど行われた。

3.2 調査票

東京工業大学 (1988) で用いられた調査票に、若干の修正を加えたものを用いた。調査票は、5 つの領域 (A: 大学全体の方針とアドミッション・ポリシー、B: 管理運営形態・予算、C: 職員、D: 機能、E: アドミッションズ・オフィスの将来)、36 の質問項目から構成されており、事前に調査対象者に e メールを通じて共有された。調査は半構造化面接により行い、調査の内容は時間的制約、状況や相手の回答に応じて柔軟に変更した。

4 調査結果

以下では、(1) アドミッション・ポリシー、(2) 組織、(3) 入学者選抜プロセス、の 3 つの観点に絞り調査結果を要約する。調査結果のより詳細な内容については、繁樹・山形 (2013) を参照されたい。

4.1 ペンシルバニア州立大学

4.1.1 アドミッション・ポリシー

公立大学として、全ての州民に高等教育へ

のアクセスを提供することを使命としている。州の全域に多数のキャンパスを持つのはこのためである。多様性は、経済状況、国際性、性別、人種、宗教などあらゆる側面において重要視されている。ただし、アフアマティブ・アクションは採用されていない。多様性は入学者選抜における選抜基準としてではなく、募集の段階で多様な集団にアプローチすることで追求されている。

4.1.2 組織

情報システム・研究、入学審査・評価、マーケティング・募集の3つの部門により構成され、総職員数は55名である。州内の出願者と個別に接触することができるように職員は各キャンパスに配置されており、小さいキャンパスでは2名、大規模なキャンパスでは10名程度が配置されている。ただし、全キャンパスの入学者選抜は、ユニバーシティパーク・キャンパスにおいて一括して行われる。

4.1.3 入学者選抜プロセス

通常の前選抜においては、高校の成績におよそ3分の2、標準試験の成績やその他の要素におよそ1/3の重みづけを与えた重み付き加算得点を用い、カット・オフ値を定めて選抜を行っている。ただし、APや優等学位(Honors)プログラム、希望する専攻に関連する科目の標準試験の得点等は別途評価の対象となるため、純粋に定量的な判断がなされているわけではない。高校での成績について、高校を単位とした重みづけによる調整は行われていない。

4.2 ブラウン大学

4.2.1 アドミッション・ポリシー

学生の卓越性(excellence)と多様性の両方を強調している。この多様性には、地理的要因(出身国・地域)、社会経済的地位、宗教、政治的背景から、学力以外の個人的特徴(リーダーシップ、独創性、野心、自発性、企業家精神、芸術・スポーツに関する達成)等様々な要因が含まれる。アフアマティブ・ア

クションは採用されていない。ただし、募集の段階で、社会経済的地位の低い家庭の学生や親が高等教育を受けていない学生により多くの労力を割いており、これらの層は結果的に多くのマイノリティを含む。

4.2.2 組織

職員37人のうち、実際に願書を読み、合否決定に携わるのは約20人である。退職した教員も含まれる。通常、現役の教員は含まれないが、特定の分野(e.g. 物理、数学)について特に秀でた出願者がいる場合、その分野の専門家として意見を求められることがある。25年以上の職歴を持つ上級職員が6人おり、上級委員会を構成している。上級職員はそれぞれ情報技術、コミュニケーション、留学生の募集など異なる領域の責任を負う。

20人の職員の男女は半々であり、年齢、人種、ブラウン大学の卒業生/非卒業生などの構成も多様である。ただし、全員が最低でも4年制大学の学位を有しており、多くが修士号、数名が博士号などの上級学位を有している。専門分野は自然科学から社会科学、ビジネスに至るまで多様だが、高校や大学における教師経験者がしばしばスタッフとして最も優秀であると評価している。

4.2.3 入学者選抜プロセス

総合的(holistic)な評価を行う。一人の出願者につき、願書を実際に読む評価者は3人である。最初に、出願者の区域を担当する職員が評価を行う。次に、中立的な2人目の職員が評価を行う。最後に、上級委員会の職員が3回目の評価を行う。この際、一部数値的な評価も行われるが、個々の選抜資料についての明確な重みづけは設定されていない。3人の評価者は合否の判断において一致しないこともあるが、不一致が生じること(評定者間信頼性の低さ)は特に問題視されていない。各区域の担当者はその区域の全ての願書の評価する責任を負い、候補となる出願者を委員会に提示する。最終的には、20名で構成

される委員会における投票によって意思決定がなされる。委員会における審議時間は短い場合数分であるが、長ければ3時間半に及ぶこともある。

4.3 ポストン大学

4.3.1 アドミッション・ポリシー

(1) 入学する学生の質を高めること、(2) 選抜性を高めること、(3) 世界的な評価を高めること、の3つを掲げている。学生の「質」としては、SAT、ACTの成績、GPAや選択履修科目の積極さ、好奇心・知識欲の高さ等を挙げている。多様性については、入学者の20%を外国人留学生とすることを目標としている。経済的多様性についても重要視されているものの、ニード・ブラインドではなく一定の限界があることが示唆されている。

4.3.2 組織

入学審査に関わる職員は55名である。全職員は学士号を取得しており、多くは修士号を持っている。リベラル・アーツ出身者が多く、専攻は哲学、芸術、歴史、数学等様々である。出願者数の増加の応じ(2005年度は31,000人、2011年度は44,000人)、職員数を数年おきに増員している。職員の中では、ポストン大学の卒業生が増える傾向にある。これは、国内外で学生を募集する際、ポストン大学での実際の経験に基づいて語ることが有効と考えられているためである。

4.3.3 入学者選抜プロセス

総合的な評価を行う。高校の学業成績(GPA、履修科目の積極さ)が最重要であり、成績の推移の傾向も考慮される。次いでSAT、ACTの成績が重要であることが示唆されている。推薦状では、主に好奇心、動機付け、積極性等が評価される。

多くの場合、願書は2～3名の職員により評価される。通常、一人目は経験の浅い職員、二人目はより熟練した職員である。この段階で上位20%は直ちに合格、下位30%は直ちに不合格とされる。残りの50%の志願者

が、3～5名で構成される委員会での合議の対象となる。委員会での合議は、5分で終わることもあれば、45分間議論することもある。委員会の議論においては、5つの選抜資料に大まかな重みづけを与えたいうえで、出願者に対し総合的なひとつの評定値が与えられる。個別の選抜資料についての評定値は与えられない。

4.4 ハーバード大学

4.4.1 アドミッション・ポリシー

学問以外の様々な分野を含む卓越性を重視する。学生が在学中にキャンパスの資源をどのように活用し、キャンパスに何をもち得るか、卒業後に何をし、他者のために受けた教育をいかに活用するかという将来的可能性の観点から選抜を行うとしている。多様性については、学生が育った環境や経験、見解、目標が全く異なる他者と接触することを重要視し、地理的、民族的、社会経済的多様性を考慮している。また、両親が4年制大学卒でない、第一世代の学生を入学させることに積極的である。

4.4.2 組織

入学審査業務に関わるアドミッションズ・オフィス職員は32～33名である。このうち、入学審査業務のみを行う職員は20名であり、残りの職員は留学生管理業務や学生への資金援助等他の業務も行っている。職員の多くが教育に関する修士号を有しており、博士号を持つ者もいる。働きながら教育を受ける職員もいる。

4.4.3 入学者選抜プロセス

職員はそれぞれ担当区域を持っており、その区域からの願書を全て評価する。その後、上級職員(e.g. 海外部門長)が評価を行う。特定の専門分野に関しては、教員に評価を依頼する場合もある。その後数名からなる小委員会(20の小委員会があり、3つの小委員会が同時に開かれる)において、6～7週間かけて可否に関する仮決定がなされる。その

後、30名職員全員からなる委員会において、2週間かけて各小委員会の作業結果について審査を行う。この委員会においては、キャリアによらず職員全員が一票の投票権を持つ。

選抜資料について、統一された明確な重みづけは設定されていないが、高校での学業達成、教師による推薦状、標準試験の成績の順に重要であるとされている。高校におけるクラスランクは相対的に重要でない。教師による推薦状では、主に学生の学習に対する姿勢、他の学生との関わり方、運動能力・芸術など特異な才能についての情報を得ることに主眼が置かれている。推薦状は、担当区域や教師を良く知る評価者により個々の事情を勘案して評価される。

5 考察

テスト理論からみた大学入試(繁樹, 2012)では、信頼性、妥当性、標準化・等化・公平性の三つの観点から、テスト理論の専門家が行うべき仕事を整理している。これを踏まえ、調査結果を(1)公平性、(2)信頼性、(3)妥当性の3つの観点から考察する。

5.1 公平性

いずれの大学も、アドミッション・ポリシーとして多様性を重視している。これは、入学後の学生が互いに学び合う教育効果を高めるために、どのような学生集団を構成するかという集団レベルでの観点が入学選抜に含まれていることを意味している。また、大学入学資格として求められる個人的資質について、大学入学後に受験者がどの程度大学のリソースを活用できるか、他の学生によい影響を与え得るかという観点が重視されている。この結果、たとえば高校生活において学業のみに労力を投下したいいわゆる「ガリ勉」が、課外活動に打ち込んだ学生よりわずかによいGPAやSATの得点を得たとしても、後者の方がより入学に値すると判断される可能性が高い。このような状況は、日本の大学入試にお

ける公平性の感覚からは不相当と感じられやすいように思われるが、アメリカでは広く受け入れられている。大学入学者選抜の文脈に即した公平感についての心理学的研究が必要であろう(e.g. 林・倉元, 2003)。

5.2 信頼性

選抜資料の評価には主観の入る余地が大きい。このことは、最も競争性の高いハーバード大学、ブラウン大学においてより顕著であると推測される(ペンシルバニア州立大学においては、GPA3分の2、標準試験の成績その他3分の1という単純な重みづけによる定量的評価が機能しているとされている)。最も競争性の高い大学においても、明らかに合格/不合格と評価される志願者は上位/下位に一定割合存在し、それらの判断はアドミッションズ・オフィスにおいてほとんど議論をせずに判断されている。しかし、中間の半分程度の志願者層については、アドミッションズ・オフィスの職員が心理測定に関する専門性を必ずしも有しておらず、多様な背景を持つ評価者による合議を重視していることから、評価の信頼性は高くないことが推測される。最終的な投票も、倉元(2005)に報告されているように、その場の雰囲気や偶然がかなり作用しやすい状況で判断がなされている可能性が高い。信頼性のみを問題とすれば、日本の一般入試の方が明らかに優れていると言えよう。

5.3 妥当性

以上のように選抜資料の評価には主観が入る余地は大きいものの、アドミッションズ・オフィスは入学選抜の妥当性を高めるための様々な工夫も行っている。まず、各大学における個別の追跡調査に加え、カレッジ・ボードと共同した妥当性検証を行っている(e.g. Kobrin et al. 2008)。また、入学後の個別の学生の定性的追跡からのフィードバックも、選抜プロセスの改善に利用している。エッセイを他人が代理で書いている可能性については

完全に排除することは不可能であるものの、標準試験の作文の成績や推薦状等の情報を利用してチェックを行っている。また、教師やカウンセラーからの推薦状は記名であり、特定の地域を担当する職員を配置することで、不正確な評価を極力排除しようとしている。

一方で、アドミッションズ・オフィス職員による面接は、原則として行われていない。学習意欲や知的好奇心等の標準試験で測定困難な要因は、面接ではなく推薦状やエッセイ、そして高校におけるカリキュラムの強さとその成績によって判断されている。実際、National Association for College Admission Counseling (NACAC)が2002年以来毎年行っている調査においては、カリキュラムの強さと大学進学予備プログラムの成績が、標準試験の成績や科目全体のGPAよりも選抜資料として一貫して重要視されていることが明らかにされており、この傾向は競争性の高い大学でより顕著である(NACAC, 2012)。大学進学予備プログラム、特にAPは全米の高校の8割で提供されており、APの認定試験の成績は、入学後の学業成績を予測することが報告されている(Geiser & Santelices, 2006)。日本の大学入学者選抜においては、高校学習指導要領の学習内容の達成を評価することが前提となっており、同様の制度を採用するのは困難と思われるが、日本における高大接続の新しい形として検討の余地があると思われる。

参考文献

林洋一郎・倉元直樹 (2003). 公正研究から見た大学入試. 教育情報学研究, 1, 14-16.

Geiser, S. & Santelices, V. (2006). The role of Advanced Placement and honors courses in college admissions. In P. Gandara, G. Orfield, & C. Horn (Eds.) *Expanding opportunity in higher education: Leveraging promise*. NY: State University of New York Press.

細川敏幸・小川悟 (1999). 米国の入試システムとアドミッションズオフィスの実際. 高等教育ジャーナル, 5, 42-48.

Kobrin, J. L., Patterson, B. F., Shaw, E. J., Mattern, K. D., & Barbuti, S. M. (2008). Validity of the SAT for predicting first-year college grade point average. College Board Research Report 2008-5.

小谷野仁・繁樹算男 (2011). セクターと難易度による分類の下での近年の大学入学者選抜の分析. 独立行政法人大学入試センター入学者選抜研究機構報告書4「大学入試の標準化, 多様化, および精密化」 pp. 35-65.

倉元直樹 (2005). ヴァージニア大学における入学者選抜と広報活動. 教育情報学研究, 3, 113-124.

倉元直樹 (2011). 大学入試の多様化と高校教育—東北大学型「学力重視のAO入試」の挑戦—. 東北大学高等教育開発推進センター(編) 高大接続関係のパラダイム転換と再構築 東北大学出版会

文部科学省 (2012). 平成24年度国公立大学入学者選抜実施状況 <

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/10/_icsFiles/afieldfile/2012/10/19/1326903_1_4.pdf 2013年2月26日 >

中井浩一 (2007). 大学入試の戦後史—受験地獄から全入時代へ. 中公公論新社

National Association for College Admission Counseling (2012). State of college admission report 2012. < <http://www.nacacnet.org/research/PublicationsResources/Marketplace/research/Pages/StateofCollegeAdmission.aspx> 2013年2月26日 >

繁樹算男 (2012). 入試に役立つテスト理論. 独立行政法人大学入試センター入学者選抜研究機構報告書7「大学入試の標準化, 多様化, および精密化」 pp. 15-29.

繁榊算男・山形伸二 (2013). 独立行政法人大
学入試センター入学者選抜研究機構報告
書10「大学入試の標準化, 多様化, およ
び精密化」.

東京工業大学 (1988). 大学入学者選抜に関す
る学内組織の在り方に関する報告書